



催眠クラス

女子全員、知らないうちに好きになってしまった

委員長の特別授業編

田中珠

©2015 一迅社
発行

ふちばら文庫





委員長とさくらさんが胸元をはだけた状態
で会話する。委員長は、下敷きで胸元を
仰いでいるので、下着まで丸見えだ。
「さくらさんも上着、脱いじゃったら？
どうせ男子もいないんだし」
(幸せだ……)



「あつ、う、ううう……ご、こんなのっ」
「授業の一環なら仕方がないでしょう。我慢しなさい」
口では何でもないように、娘をいさめる母親を振舞っ
ているけど、その顔は耳元まで赤く染まっている。



「わ、鷲ノ宮さん、そんなにしたら上手く測れないって!!」
「んくっ、し、い、言われなくても、う」
(意外と性に関しては積極的なのが?)
陰部に溜りこんだメジャーが、鷲ノ宮さんの愛液でいやら
しく光る。
「ひんっ!? なあつ、んんっ、ああつ!? ひうっ、んんっ!!」
雷に打たれたように、鷲ノ宮さんの身体が震えだした。



催眠クラス

~女子全員、知らないうちに妊娠してました~

委員長の特別授業編



ぶちばら文庫

著 田中珠

画 望月望

原作 OLE-M

クラス名簿



いざき まこ
猪崎 まこ

元気で快活なスポーツ大好き少女。



このはな さんご
木ノ花 珊瑚

コミュ障で話す事は滅多にない。



ねこいち みやこ
猫田 都

新聞部に所属し、日々ネタを探す。



あまみや あきら
雨宮 晶

大地の担任で生徒の面倒見が良い。

すみの だい ち
澄野 大地
テレビ番組によって、催眠術を使えるようになった青年。



こひなた みゆ
小日向 みゆ

ついじりたくなる可愛さを持つ。



かぐらざか みお
神楽坂 滯子

美琴の付き人で常に付き従う。



どい さやか
土井 沙耶香

田舎生まれを隠すため外見が派手。



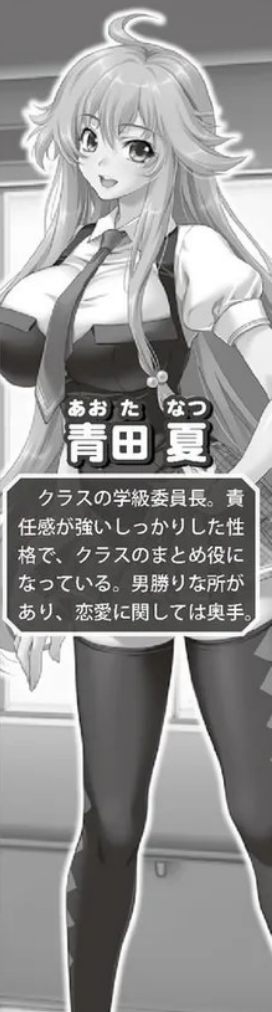
くさじょう さくら
九条 さくら

才色兼備なカリスマ生徒会長。



すみの はな
澄野 花

大地の同い年の妹でクラスも一緒。



あおた なつ
青田 夏

クラスの学級委員長。責任感が強いしっかりした性格で、クラスのまとめ役になっている。男勝りな所があり、恋愛に関しては奥手。



ひむろ まい
氷室 舞

生真面目で口うるさい風紀委員。



みずの あや
水野 文

いつも静かで大人しい文学少女。



いなみ ましろ
伊波 ましろ

新体操部だが極度の恥ずかしがり。



かえで
楓 あげは

大人気の国民的アイドルの一員。



わしのみや みさき
鷺ノ宮 美琴

財閥のお嬢様。男性が少し苦手。



プロローグ

誓って言うが、俺はオカルトやUFOの類は一切信じていない。占いやらニューエイジ思想やらも一緒だ。

だから起き抜けに、妹がテレビにかじりついて催眠術特集など見ていたりすると、その日一日が呪われるような気分になる。おっと呪いつつのもオカルトか。

「ねえお兄ちゃん、催眠術だつて」

顔を洗ってリビングの扉を開けたとたん、妹の花が声をかけてきた。

「ああ、ちょっと前にも流行ってたな」

なるべく無難な言葉を選んで、チャンネルを変えようとしてリモコンを探したが、花の手がしっかりとそれを握っている。

「花、そんなに興味あるのか」

「うん、だって相手を思うがままに操れるんだよ。すごくない？」

花が目を輝かせて同意を求めてくる。こんな顔をされたら無碍に否定するわけにもいかない。

目次

プロローグ	5
第一章 催眠開始！	15
第二章 挑戦！ 校内催眠	44
第三章 カラダで一問一答	81
第四章 催眠で実技講習！	116
第五章 親子丼で分かり合おう	143
第六章 学級委員のお仕事	181
第七章 夏の気持ち	218
エピローグ	246

「本当だったらすごいけどな。テレビなんてヤラセも多いし」
 さつさと話題を打ち切ろうと、俺は冷蔵庫に向かおうとするが、テーブルの上にはすでに朝食が二人分揃っていた。仕方なくそのままイスを引いてそこに腰を据える。
 コップにつがれた冷たい牛乳を口を持っていく。いつもの朝の光景だ。ブラインドを上げた大きめの窓から差し込む朝日、パジャマのままの花。

「ヤラセには見えないよ」

花が口を少し尖らせて言った。

病弱な花は、ほとんど学校には行かない。両親揃って海外出張中なので、ここ数ヶ月、花はほとんどの時間を一人で過ごしている。テレビが唯一の友達のようなものだ。俺も話し相手くらいにはなっていてやりたいが、なかなか年頃の女の子の相手というのは難しい。それがオカルトな話題ともなればなおさらだ。

テレビのスピーカーから、リポーターの甲高い声が聞こえてきて、花は再び画面に見入った。

「わざとらしい」

朝食を準備してくれた花の機嫌を損ねないよう、そつと口にしてみる。

「でも、最近は心理学でも使うらしいよ。催眠療法……だったかな」

花が付け焼き刃の知識を披露する。そして、名案でも思いついたかのように俺の方に顔を

を向けて言った。

「お兄ちゃんも練習してみれば？ よくスプーン曲げとかも真似したら出来るようになったっていうじゃない」

「出来るわけねーって。そりゃ、出来たら面白そうだけだな」

俺は花の発案を一笑に付した。

「やってみないと分からないじゃない。私も協力するよ！」

「協力って何をするんだよ」

俺のその問いかけに、花は「うーん」とお茶を濁して、画面に顔を戻した。毎朝占いの話題でキヤッキヤッと盛り上がってるクラスの女子連中を思い出す。この年頃の女の子はオカルト好き過ぎだ。

「私を実験台になるから、催眠術が成功したらお兄ちゃんは私に何をしてもいいよ」

「……花、もうテレビ消すぞ」

目を閉じてうっとり妄想に浸っている花の手から、俺は問答無用とばかりにリモコンを奪い取った。

「やめてよー、私まだ見てるのに」

「ご飯を食べる時はテレビを消すこと。母さんがいつも言ってるだろ」

もっともその母さんが海外に行ってしまったからには、俺もそれは守れていない。

「私、まだ食べないもん」

「今から食べるんだよ」

「お願い、このコーナーが終わるまででいいから」

——結局、俺は食事しながらリポーターの声で延々と『催眠術のやり方』を聞かされるハメになった。自分で言うのもなんだが、俺は花には甘いのだ。

「ね、すつごく簡単そうじゃない？」

心ゆくまで催眠術の素晴らしさを堪能した花が、俺の向かいで紅茶に砂糖を入れながら言う。どうでもいいが、この年頃の女の子は糖尿病の心配をしたくなるくらい甘いものも好きだ。

「そうだな。ロウソクの炎を見つめて三つ数えるなんて中二病もいいところだ」

「また夢のないこと言ってる。だったらホラ、ここで試してみたら？」

花がそう言ってる、机の隅に転がっていた父さんのライターを手を取った。

「火遊びは危ないぞ。って言うか父さん禁煙したんじゃないのかよ」

「お父さん、意志が弱いから。ほら、やってみて」

「俺がかけるのかよ」

「だから、お兄ちゃんなら、私に何をしてもいいって言っただけでしょ？」

花が俺にライターを握らせようとして、俺がそれを押し返す。そんなことを二、三回繰

り返していると、チンというトースターの音がした。

「あ、パン焼けたよ」

花はあっさり催眠術への興味を失い、ライターを放り出してキッチンへと駆けて行った。

パンを齧っている花に見送られて家を出た。まだ早い時間だったが、学級委員である俺は早めに登校して、先日アンケートを取った『校則の改正希望一覧』をまとめなくてはならないのだ。

品行方正とは到底言いがたい俺が、学級委員なんて面倒くさい仕事を引き受けているのには理由があった。一つには先生と仲良くなって試験範囲を覚えてもらえること。もう一つは……。

(……いや、理由ってわけじゃねーよ)

俺は自分で自分に弁解する。そう、本当に理由というほどのことじゃない。単に幼馴染に誘われたというそれだけの話だ。ただ、その誘い方がいささか強引だったただけだ。

(まあ、あいつの強引さはいつものことなんだけど……ん?)

気付くと、周囲が霧に包まれていた。

(迷ったか? いや、いつもの道を通ってたよな)

さっきまで晴れ渡った朝の澄んだ空気に満ちていたはずなのに、いつの間にか空はどん

よりと曇り、目を凝らさなくては周りを見ることも出来ないくらいに霧がかかっている。考え事をしている間に天気が変わったのだろうか？ それにしては急すぎると思いがら俺は目をこすった。

「あれ？ なんだろ」

思わず声に出していた。

視界不良の中、数メートル先の路上に光るものが転がっていた。

なぜそれが気になったのか、分からない。とにかく俺はその光るものところに歩み寄っていた。

「ライター……だよな」

鈍い黄金色に輝くそれは、間違いないライターだった。オイル式で、火打ち石を使って着火するタイプで、良く戦争映画なんかで見かけるヤツだ。だいぶ古いものらしく、表面のツヤは消えていたが、その分いかにも使い込んだ感じのする代物（モノ）だった。

意外と高価なものかもしれない。こういうのはコレクターズ・アイテムだったりするからな。

そう思っただけで周囲を見回すが、不思議なことにあれほど濃厚に立ち込めていた霧は消え、通学路はいつもの賑わいを取り戻していた。まるで俺がライターを拾う間に、世界のスイッチが切り替わったかのようなようだった。いや、本当に俺の頭の中で、何かヘンなスイッチが

入っていたのかもしれない。

「寝不足かな？」

パンッと掌で頬を叩いて、ぼけた頭をしやきつとさせた。ともあれ、こんなところで道草を食っているわけにはいかないのだ。さっさと学校に行かないと。

俺は何の気なしにライターを制服の尻ポケットに入れて、学校への道を急いだ。

* * *

結局、予定していた時間よりも遅れて教室に着いた。

すでに大半のクラスメートが揃っていて、他愛ない会話に花を咲かせている。

（いかんいかん。先生が来る前にチャチャッとまとめないと）

俺が席に座って鞆から、アンケート用紙の束を取り出そうとした時、背後からはきはきとした明るい声が聞こえた。

「お、今日は朝早いね。おはよう」

「あ、おはよう、委員長。つてか早くねーし」

おそらくは嫌味であろう挨拶も、こう明るく言われるとそう聞こえない。そんな不思議な魅力が、この声の持ち主にはあった。

腰まである栗色の長髪、目が大きくて愛嬌のある顔立ち。そして何より激しく存在を主張するおっぱい。

委員長——本名は青田夏^{あおたなつ}。リーダーシップがあつて、人望が厚いので、小学校の時からずつと学級委員長という変わり者だ。そのせいでもう委員長つてのが名前みたいになっている。

なぜ小学校時代のことを知ってるかというと、それは俺が委員長と幼馴染というか腐れ縁だからなわけ。実のところ俺が学級委員長なんかやってるのは、この委員長のせいだったりする。

「ねえ、私のこと手伝つてよ。男子のことはよく分かんないからさ！」などと笑顔で言われて、断るきっかけを失ってしまったという次第だ。

(まあ、何というか、そういう押し強さも人望のうちなんだろうな)

それに向こうは一向に気にしていないようだが、第二次性徴期になってから著しく成長を遂げた巨乳が常に俺の視界にちらついて、ぶっちゃけ何を言われてもおっぱいが気になつて言い返せないのだ。

「どうかしたの？ じろじろ見つめちゃつて」

委員長のあつげらかんとした声に、俺は我に返つた。イカン、またおっぱいに見とれていたらしい。

「いやいや、何ていうか、朝早く目が覚めてさ」

「なるほどねえ、お早いお目覚めなこと」

委員長が面白そうに目を細める。そこで俺は自分の抱えていた仕事のことを思い出した。

「あ、そうだ。委員長、あのさ」

「ん？ どうかした？」

「ちよつとさ、頼みがあるんだけど……」

もちろん、今やつてる仕事を手伝つて欲しいというお願いだ。何しろ本当の期日は昨日だったのだ。

「断る！ 自分の仕事でしょ。そういうのは、ちゃんと先生に言つて」

「うぐぐぐ……」

取り付く島もないとはまさにこのこと、俺は菌噛みする他ない。

「まずは自分で出来ることをやってみ。そしたら、手伝つてあげるかもしれないよ」

「おお、ありがとう。分かつた、がんばる」

一転していつもの笑顔になって、ドンと自分の胸を叩く委員長。その頼もしい仕草に俺は感謝しながらも、ぼよんと揺れるおっぱいにまた目が行ってしまう。

「ほら、そんなこといつてる暇があつたら手を動かす。先生来ちゃうよ？」

気が付けば教室中がにぎわいだして、聴き慣れたヒールの音が廊下に響いていた。

ガラッと教室の扉が開いて、グレーのスーツに身を包んだ黒髪の美人が姿を現した。

「おはよう。ほくらチャイム鳴ってるわよ？ みんな席について」

「あ、あきら先生おはようございます」

学級委員である俺はすかさず挨拶する。

「おはよう、澄野くん。今日は珍しく早いね」

「やだな先生。俺、遅刻なんかしたことないじゃないですか……ははは」

俺がそう言うと、少しきつい顔をしながら、あきら先生も笑う。

雨宮晶先生。俺のクラスの担任だ。眼鏡の似合う、いわゆるクールビューティーで、俺たち生徒の間で絶大な人気を誇っている。

ただ、俺は絶対目をつけられているような気がする。副委員長として真面目にやっつてるんだけどなあ。

「ほら、早く席につきなさい。朝のホームルームを始めるわよ」

あきら先生の一声で、ばらばらと各々の席にみんな座りだす。

いつもと変わらない日常がこうして始まった。

思えば、この日を境に俺の日常は急展開していったのだ。

第二章 催眠開始!!

あきら先生は話が上手い。簡にして要を得ているから、ダラダラとホームルームが長引かなくていい。特に今日はあきら先生に、学級委員の仕事の件でお願いしなくてはならないので、助かる。

「それじゃ今日はここまで。みんな、授業が始まるまで静かにしてるのよ」

日直が号令して、皆でお辞儀をすると、あきら先生が出入口へ向かった。俺は猛ダッシュで先生の進路を阻む。

「せ、先生っ」

「あら、澄野くん。何か用かしら」

先生が優しく微笑む。よし、今ならいける。

「その、例の資料の件なんですけど」

「今日の放課後には職員室の私の机の上にあるようにしてね、よろしく」
優しいが、有無を言わせぬ口調だった。眼鏡の奥の目は笑っていない。

「……はい」

仕方ない。目をつけられているだけあって、こういう時は不利なのだ。

これが委員長からお願いだったら、あきら先生も聞いてくれるんだろうけどなあ。

「あの、先生」

「何かしら、青田さん」

俺がすぐご引き返そうとしたら、委員長があきら先生を呼び止めた。何だ？ 俺がサボってたとでもチクるつもりか。

「先生にお願いされた資料なんですけど、集めるのに時間がかかっちゃったので……。何とか明日まで待ってもらえないでしょうか」

「……そう、青田さんがそう言うなら仕方ないわね」

「おおっ、委員長、まさかのフライングプレー！」

「ありがとうございます」

「じゃあ、『澄野くんを』よろしくね」

あきら先生が俺の名前を強調しているのは気になったが、委員長のおかげで助かった。やっぱり何だかんだ言っても頼りになるなあ。

「ほら、何とか延ばしてあげたわよ」

「すまん、助かる」

「ホントに世話が焼けるわね。何だか私、いつつもあんたの尻拭いばかりしてない？」

まあそれは事実なのだが、俺を学級委員にしたのも委員長なのであって、任命責任というのもあるんじゃないのか？

「なに？ 不満でもある？」

「いやいやいや、滅相もない」

「いかん、顔に出ていたらしい。あわてて両手で顔をぐにぐにとマッサージする。」

「ふふっ、また青田さん、澄野くんのこといじめている」

「あの二人、仲いいよねえ」

「なっちゃん、学級委員決める時も、無理やり澄野くんのこと相方にしてたし」

「女子たちがうわさ話しているのが耳に入ってきた。」

「違う違う。見ての通りいじめられているのが事実の全てだ。」

「学級委員だって上手いこと言いくるめられただけだし。おっぱいパワーもあったしな。」

「ちょ、待ってよ！ そんなんじゃないから!!」

「あはは、冗談だよ、なっちゃん」

「もうっ、誰があんな山猿なんか」

「でも、幼馴染なんでしょ？」

「昔っからの知り合いなだけだっけ！」

委員長がさっそく否定してる。即座に否定されるのも、それはそれでモヤモヤするな。

でも委員長とは昔はよく一緒に遊んでたんだよな。いつ頃からこんなツンケンした感じになっただけ。

小学生の時に『オトコオンナ』って言ってからかかってたせいかな？ いや、あの時はそのたびに特別教室に呼び出されてバシバシ叩かれたから、恨みつこなしだよなあ。

それとも中学生の時に『お前おっぱい、でっかくなつたな』って言ったのがまずかったか？ でもあの時から委員長のおっぱいの成長は著しかったからなあ。俺もリアル中坊だったから指摘せざるにはいらなかった。若かったなあ。

「まったく、あんなのせいで余計な嫌疑をかけられたじゃないの」

「嫌疑って、そんな大げさな」

「罰として、資料は今日放課後に作ってね。私、見張ってるから」

「手伝ってくれないのかよ！」

「手伝ったら、あんなのためにならないでしょ」

こんな調子でいつも委員長に言い負かされてしまう。俺もこれ以上なぜか強く言えない。何というか、委員長には強く出ることが出来ない。

そうこうする内に、予鈴が鳴った。

「いけない、次の授業、体育じゃない。ほら、みんな更衣室に移動、移動！ あんたも男子を移動させてよ！」

委員長に勢い良く背中を叩かれた。

体育の授業は嫌いじゃない。いや、別に小学生みたいに体育と給食が得意科目とか言うつもりはない。まあ得意なんだけども。

理由は簡単で、終了間近になると先生も適当になって、自習みたいになるからだ。

唯一良くない点といえば、女子と男子で授業内容が分かれているところくらいか。

今日もまた、男子の体育は授業時間を半分以上残して自習同様となっていた。

サッカーにそれほど興味も関心もない俺としては、女子の体育の授業内容の方がよほど気になる。

(ここで授業が終わるまでぼーっとしているのも暇だし、女子の授業でも見に行くか)

我ながらしょうもない思考だと思っただが、俺も健全な男子であるからして、健全な女子の躍動する肢体に興味があるのは仕方ない。

女子の体育は体育館でバレーボールのはずだった。

バレーボールと言えば、俺の求める躍動する肢体には最も適したスポーツの一つである。実際、巨乳の子だと見事におっぱいが揺れる。ゆっさゆっさ揺れる。

「そーれっ!!」

廊下を歩いて、体育館まで近付くと、女子たちの元気のいいかけ声が聞こえてきた。
 (さて、どこから見学したものか)

さすがに授業中、真正面から堂々としていくわけにはいかない。俺は教室棟から体育館へと繋がる渡り廊下を前にして、きよろきよろと辺りを見回した。

(ん？ あれっば)

教室棟の一番端、もうすぐ渡り廊下という場所にある、目立たないドア。

目立たないのもそのはず、女子更衣室のドアである。そんなものが目立っているのは、もちろん困る。そして今の俺にとっては、目立たないということはすなわち人目につかずに忍び込めるということである。

「……こそこそ」

口に出す必要などないのに、なんとなく擬音を口真似してしまうのは照れ隠しだろう。

ともかく俺は気付くと禁断の扉を開き、秘密の花園へと足を踏み入れていた。

「誰もいないな……」

ドアを後ろ手に閉めて、俺はそっと人心地ついた。

うるさいくらいに高鳴る胸の鼓動を抑えて、俺はなるべく平常心を保つよう心がけながら周囲に目を走らせた。

(うおおおっ!! 予想通りだ!)

女子更衣室の中には、当然のことながら脱いでたたまれた制服や、女子たちが身につけていたであろうモノが入っている。

俺の理性のタガは一瞬にして吹っ飛んでしまった。

手近にあった誰のものか分からない制服を引っ掴み、己の顔を埋もれさす。

(うおー! やっべえ……くんくん、すううう)

濃厚な女の子のおいがただよう空気を、胸いっぱいになるまで吸い込む。

若干汗臭いけれども、それもまた一興。

「はああ……たまらん、たまらん」

すうはあ、すうはあど深呼吸を何度も繰り返す。傍から見たら変態そのものだが、実際そうなんだから仕方ない。

俺はかぐわしき香りを存分に堪能してから制服を元の場所に戻し、次なるターゲットを探した。

ゴソゴソと、目についたロッカーの中身に手を伸ばす。目的のものは決まっている。

「お、おおお!!」

探り当てたそれを、そっと引き出してまじまじと観察した。

「投石器みたいだ。でかい……」

俺が手にしているのは淡いピンク色のブラジャーだった。カップの部分が余りにも大き

い。もしこれが仮に投石器だとしたら、俺は戦国時代を生き残れるだろう。

「……ごくっ」

俺は生唾を飲み込んで、長年抱えていた妄想を実行に移す。

「……」

何も言わず、誰のものかも分からないブラジャーを頭にかぶってみた。

ほんのりと洗剤のいい香りと、香水の甘いにおいが鼻腔をくすぐる。

これだけでも、すでに勃起してしまいそうだった。

「手触りも、俺の穿いているやつとは全然違う……」

当たり前過ぎる感想を思わず呟いてしまう。何の素材で作られているのかは分からないが、すべすべの感触だった。

（ここは天国か？ すんすん）

何度においを嗅いでも飽きない。時間を忘れて、ただ目の前の獲物に喰らいつく。

待てよ。今ここにブラジャーがあるということは、つまり――。

「っ!! ……いやいや、あぶねえ」

興奮に我を忘れて大声を出してしまうところだった。

まさに目の前、今は俺の手に握られているブラジャーがあつた場所には、ブラとお揃いの色のパンツが慎ましくたたんであつたのだ。

持ち主の姿を確認出来ないのは正直痛い。

けれども、この布は女の子の大事な大事などころを守る布であつて……つまり言いたい

ことは俺も分からないが、とにかく持ち主はどうあれ、いいものなんだよ!

「はぁ……これはたまらん……」

今まで、おまんこが接触していたであろう部分に、鼻を近付ける。

ゆっくりと息を吸い込んで、吸い込んで……。

むふううう。

おしつこの拭き残りのすこし独特のにおいや、洗剤のにおいが混ざってなんとも言い難い。だけど、これが今まで女の子のおまんこに触れていた部分だと思つと、それだけで自然と体勢は前かがみになっていく。

どうしよう、物ってしまう。

このままこの下着にお世話になるか……と考えた思考を、必死で押し留める。もしここで、フルチンになった状態で女の子たちが戻ってきたとしたら。

（見つかつたら……たぶん委員長に殺される）

俺のミッションは、女の子たちが戻ってくる前に、ここを脱出しないとイケないのだ。何しろ命が惜しいからな。

（でも、まだ大丈夫だろう。すううううう、むふううううう）